

令和6年度「男女共同参画推進フォーラム」派遣研修 受講報告書

令和6年 12月 13日

苫小牧市長 様

氏名 田中匡恵

派遣研修を受講した結果は、下記のとおりです。

記

- 1 期 間 令和6年11月30日(土)
- 2 主催・会場 独立行政法人国立女性教育会館(NWEC)
- 3 参考資料等 添付あり ・ 添付なし

4 全体感想

今、私の手元には国立女性教育会館(ヌエック)から資料でいただいた「男女雇用機会均等法すごろく」がある。このすごろくは、戦後から現在までの男女参画の歴史をわかりやすく表現し、楽しみながら学べるようになっている。このすごろくのあがりの部分には「あがりはまだ先」という言葉が書かれている。この「あがりはまだ先」という言葉は、ジェンダー平等の実現がまだ道半ばであることを象徴していると思った。

フォーラムの前日には、ヌエック内にある女性教育情報センター、アーカイブセンター展示室ガイドツアーに参加することができ、女性・家庭・家族・男女共同参画に関する膨大な専門図書や資料に触れることができた。フォーラムには、自治体職員、教育関係者、企業関係者、地域のリーダーなど、様々な立場の人々が参加されていた。講演や交流のなかで、女性の抱える課題の内容は世代交代と共に変わっていて、女性の管理職、女性の雇用状況もいまだ改善されてなく、女性の孤立とメンタルヘルスの問題も深刻化している現状も知った。明るい話題としては全国で女性グループが立ち上がり、地方議会におけるジェンダー平等を推進の行動が報告されていた。

わが苫小牧市には道内でも先駆的な存在として重要な役割をもつ男女平等推進センターがある。男女平等推進センターは、市民生活のあらゆる場面に関係してくることがらに、官と民を公と私をつないで、情報をつなぎ、地域をつなぎ、世代をつなぎ拠点として意味や重要性を再認識させていただいた。そし

※裏面に続きます。



て、私自身も自身の固定観念や無意識のバイアスに気づきをいただき、さらに新たな視点で地域社会への在り方や貢献について考えるきっかけとさせていただいた。そして、このような個人の意識の小さな変化が、草の根の対話を生み、より大きな社会変革につながっていくと思った。私も学んだことを活かし地域に貢献していきたい。改めて、素晴らしい機会を提供して下さった苫小牧市に深く感謝申し上げたい。

講演 「女子差別撤廃条約から見る日本のジェンダー平等の今」 10:30~12:00

講師：浅倉 むつ子（早稲田大学名誉教授）

【内容・所感】

日本は女子差別撤廃条約の理念実現に向けて前進してきたが、特に政治・経済分野での男女平等達成には更なる努力が必要とわかった。「女性活躍」は重要な社会課題と位置付けられ施策が進められている。しかし、今回のフォーラムをはじめとして、多くの自治体で講演会やパネル展を実施しているが、知名度や関心はあまり高くなく、この無関心にどのように取り組んでいったらよいのかと考えさせられた。また、法律や政策が整備されても、実際にそれを利用する女性たちの意識が低ければ効果は限定的だと感じた。講師からこのような話があった。自身が講義するロースクールで男子学生が「早稲田太郎君の一生」というタイトルで、男性として生まれ、男性として生きていく、人生の歩みを発表したそうだ。実は、男性自身も「男として生きる」ために、ジェンダーバイアスの中で生きていて、ジェンダー平等は女性だけの問題ではないことに気づかされた。講師は続けて、このように話された。「自分事としてとらえたときに、力を発揮していく」と。ジェンダー平等や女性のエンパワーメントを考え推進していくには、法律のルールや行政のサポートだけでは難しい。女性自身の意識向上が不可欠だと思う。ジェンダーのみならず、あらゆる差異を超えて、そして社会全体で「自分事」ととらえて、過去ではなく、新しい現実と一緒に作りあげていかなければならないと思った。

シンポジウム 「日本の男女共同参画、これまでとこれから」 13:30~15:30

第一部 講師：大沢 真理（東京大学名誉教授）

第二部 登壇者：U_30 世代の皆さん3名

【内容・所感】

日本は現在、男女間の格差を示すジェンダーギャップ指数が、世界 146 カ国中 118 位と低く、G7 の中では最下位である。今回のフォーラムの中でたびたび NHK 朝のテレビ小説「虎に翼」の主人公寅

ちゃん（主人公のモデルは三淵嘉子氏女性法曹の先駆者）のことが話題に上がった。ドラマで寅ちゃんが言った次のようなセリフがある。「生い立ちや信念や格好で切り捨てられたりしない、男や女かでふりをかけられない社会になることをわたしは心から願います。いや、みんなでしませんか。しましよーうよ！」。シンポジウムでは、この寅ちゃんの呼びかけに集ってきたような若い世代の3名の女性たちの登壇があった。まさに「行動をしている」女性たちだった。1人目の大学院生は教育方法学を研究しながら、一般社団法人 Spice の代表理事として若者の社会参画を促進する活動を行っていた。2人目の大学生は岩手盛岡でジェンダーカフェを立ち上げ、月1回のペースで、10~30代を対象としたジェンダーに関する"モヤモヤ"をテーマにしたおしゃべり会などを開催していた。3人目の大学生は NPO 法人「お客様がいらっしやいました」で生理の貧困をはじめ、生理に悩む方への支援と生理に対する理解を高めることを目指す活動をしていた。3名の方々は、それぞれ幼少期から高校生の中に体験した事柄などから次第に男女差に関する疑問が生じ、そして成長した今、いろいろな活動を立ち上げ、それに生き生きと取り組んでいた。わたしはその活動内容と行動力に感服、感動し、大いに刺激をうけた。そして、私たち上の世代は、若い世代に、若い世代は上の世代にと世代間で「過去」と「今」を学び合っていかなければいけないと思った。

シンポジウムに登壇した3名のように、ジェンダーギャップに気づき、具体的な行動を起こす人々が増えていくことが、日本の男女共同参画の未来を明るくする鍵となると強く思った。